

成形圖說

農事部

十四



共廿本

特別

二一

144

13



加
號 144
卷 413

成形圖說卷之十四

目錄

苞裏

量秤

度羅

蓑笠

箕畚

蓆篲

筲箕

籃檐

附科槩

附搭瓜

杖



成形圖說卷之十四

成形圖說卷之十四

農事部 農具類

俵 類聚國史の俵ハ和字ナリ蓋把稗の畧一説は田稗也
也 日次紀曰歳且海嶺と俵子と俵子と俵子ハ其状ハ儼るの祝詞

加麻須 書紀裏の字 宇知麻伎 打卷の謂 散米ともい

や或曰俵ハ字書に散也とわハハ散米 麻留 日向方言
といふなり取置しあんとすハハ散米 麻留 日向方言

幾丸 記殘篇 安良麻伎 和名 鈔引唐韻苞苴裏魚肉今也
幾丸 記殘篇 安良麻伎 和名 鈔引唐韻苞苴裏魚肉今也

苞 音字正字通今人混包 又口 玉堂雜字布袋とあり○
也年貢米戔納者又て蒲笥の字より借る所と云接は今西州
の俗ハの字とて蒲笥の字より借る所と云接は今西州

成形圖說卷之十四

俵てふ者書紀よハ見る所なしはもとど雜式等既よ六の
との載られざるはふよりゆゑなり又諸國風土記
の中に公穀幾九假粟幾九とある九ハ即俵といふあり
つしとよと日向國人ハ俵といふ九といふ者日向ハ太
むりー 神聖都とある所の舊墟ありハ伊勢や日向の諸
母之言靈乃散失せし傳ふるわざおほく徴とてをさ
よと四季物記よはしめてるしハ假初よをさつと一
婦とをなへおととて著て伊勢加茂山聖宮とありハ
妻のぬらうをさつとていひておくともつねと積とい
ひ又ゆるとげまわらかきぬらうといひ候とかげとい

い候とみ水何をばといひありととみゆるといひり
いといし原ふとそのおいとをさつとありとくさ按よ
孝徳紀よ裏の字加麻須とあるものいふくハの俵の事
よて後ハ蒲筍とふわのどを遺物とてし字書よ裏ハ
苞也と注して平壤録よ積米豆十六萬八千餘包とある
包ハ即俵とおれし物土の俵ハ井網代とありとも米一俵
の收票よ一包とてはるる太平記よ龍宮神の頼よて友
原秀郷百足の蛇と射壇とては就神悦て秀とて極く
款待と刀一振卷絹一錠一領頸飾とる俵一赤銅の撞鐘
一と俵といふ俵ハ中なる納物と取とてをさつとる間

財宝倉子實て衣裳身に似たり故に生名氏俵藤太より
 いひくも也と載り頭結くるといふは堅俵をて上の
 より抽入る形ありし又俵中乃納物と何と行むり
 一ハ米のこ納りおるハ限らざるありん夫敷の物とけ
 うせしよしより俵をたと採りりハ俵を著しきよ
 似しれ源弘賢の著せしもの申し親宮と々の源流は
 郷傳より依龍神請行龍宮討龍神之敵得實俵世
 人号俵藤太と名えりりも源流とてやれん
 加麻義亦惠奈麻伎とも卷茅ともいふは蒲を製し或
 ハ茅をて毛為りぬる俵の名をりし万葉の鈔に細き繩
 と綁て持物入物おして唐中人の扱とのより又蕒筥と

りよの西州乃俗久夫伎といひ袖中鈔に裏と久々
 通と刻るハ右言より和名鈔傀儡子と久々豆と記せし
 ハ裏物と負とて名りり今の俗よふおるはしとら
 裏と負わりきて戯曲とらるや

 按蕒ハ今所在海畔
 大隅國益敷島は産
 せふ大隅國益敷島は産
 せふ大隅國益敷島は産

 志蕒生三稜爾雅謂之望江生者為淡蕒近海者為鹹蕒土
 人採以捆屨織席亦可為繩香山縣志蕒水草也種之泥積
 可以成田方圓二種肇慶府志謂之三茨草和名鈔は
 ハ莎草と充萬葉と湊葦とよめるものと注やり

 此ハ裏ハ今の蒲筥ふして久々通ハ即蕒筥より草の
 異ふると以て名と別たり説文に蕒草器論語に荷蕒皆
 この物よりし

 凡西抄にて米と盛に蕒とよめるものハ皆蒲
 筥蕒筥より將に上よへるものとて

其り納稅所子て量て後始て儀入る大とより儀ハ始
米と入る子量り子し量りハ横二口と并ありとのあり
俗或ハ横儀 じり儀とふわのハ二升以上五升盛乃
といつり
よのちて今乃裏れおとし 蝦夷の比は横か 然し裏と
は加麻須とも呼しは即今儀とふとのめて一統子儀
の大きくするは上と納る料と製へるりや類聚國
史延曆十七年十月勅量收糶穀斗斛有限又曰糶一儀二
升已上穀亦斛別五升已上と云々雜式曰公私運米五斗
為儀仍用三儀為駄是五斗儀の始とて蓋穀米より凡駄
荷馬の荷の重の積と四十貫といふと五斗儀二儀と負
たる積といつるは法國よりきて五斗儀四斗儀三斗儀

二斗儀多との不同あり大りハ三斗五斗入と通例と
以上方ハ四斗儀河東北ハ五斗儀多し又量れハ三
斗五升乃儀多し三斗七升收も及ふといふは米久
く儀並ハ耗る持運ハ眼おる是等の欠立より此歟
法河に 譬ハ東三斗五升一儀とあるは二斗の四斗と
るがぶ 加て三斗七升入りハ斗入ハ四斗二升ふとの
とし 又從て竊えとのありて麩米の稟と交れとのは
常に定法より七升同少儀とあるは之ふより後世儀
毎子年表名主表方掛版何がし何ぐりふといふ若牌と
儀の申子掃て奸濫と防く謀となり是を申札せし
然とも穀万儀のふやゆふも儀ぐりく公ハ新惠と

加へら敷きども猶吏従て私とあるものたるごとく
 と防りけは破と破敷おと嵐の塵蹴穿りりごとくし又月廩
 守と交れとの儀のいふふ少はは大子罵り急敷法
 に定式の入よるも多しはは大子善を縁やの少き
 と交さるはは多きも交はさる理も多しはは多し皆
 こつとつし貽謀録云李奮官監察御史得廩米母量之三斛而贏問故對曰御史米不駮問車傭幾何對曰御史不賞也母怒教歸餘米償其傭とあり不駮は此又は盛立量りて起收り通鑑後周紀凡倉場庫務掌納官吏無得收斗餘註斗餘緊量之外又取其餘也是欠少りて量出と履はるは禁りり也○昔は和漢
 共よ来と袋は納りし糧米のよるはは多しはは多しはは多し
 袋は納りしかつげりと今ハ賤布と呼へりひりし大國玉

命を兄の爲に袋を負とて古事記よるごとく而も
 今の又黒と儀と踐るる像也はハ贅より儀と負よて
 備ふはし其傳も此神負袋者とも賤しきはは見
 役もつる所由ハ凡て大なる功業と立むとす人ハ
 細事ハハかかはぬものといふ今遺のさへは太古ハ袋負りりの俗ありて物土まで
 是似兼わつ子路ふんと軍將を志すは功業ととある
 子路も義よのてして衛子事て大勇と失ひ祿の爲
 子絶櫻と活しは惜むる説文子路負重道遠不擇地而休家貧親老不擇祿而仕昔
 者由事二親之時常食藜藿之實而為負米百里外親没之
 後南遊於楚從車數乘積粟萬鍾累茵而坐列鼎而食願食

藝薈為親負米之時不可復得也枯魚銜索霜露不停賢者
 欲養二親之壽如過隙草木欲長霜露不停賢者欲養二親
 不待故曰家貧親老不擇祿而仕也子路負米之勞安斯方の
 入事しある負米と後の画ある子路負米の勞ハ斯方の
 儀あり是と大黒は儀踐一し像つく晴蛉日記曰二年天
 地とふくろふぬいてと漏まいと徳しくありてとあり
 獲衣も此を引るりいふ一の使詞ふるへしとん
 えり又曰とふさ人いふはうとくわてよ
 里井これハえ感ある地さりのでくひふとすわいと
 にわり子きてきぬれとさぬくつらちふとて枕を踐
 にえふくろに入らるる弓箭槍剣ふとてつらくと誰
 ぞと四ふにけいおて何かしどのくといひ行ハいとよ

拾遺集物名

筑紫より

くまて

来れと

つとも

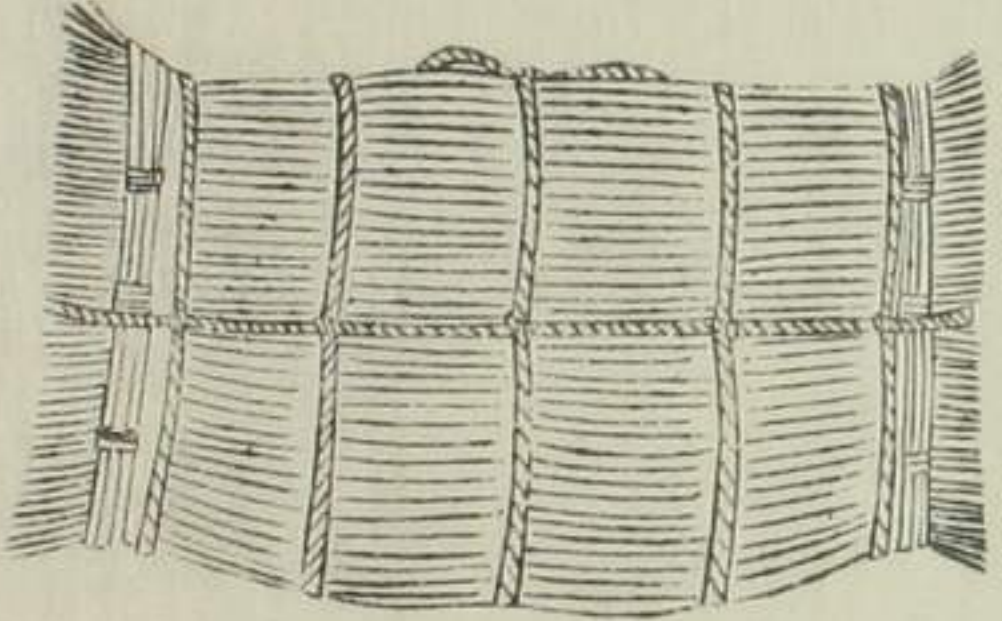
太刀のあし

緒革乃

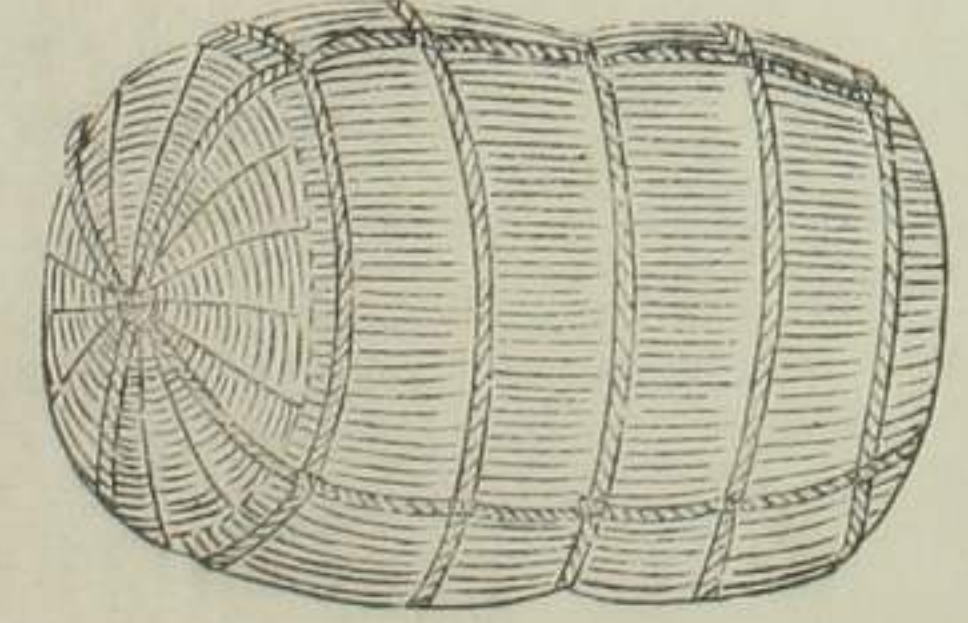
端のこそ

あは

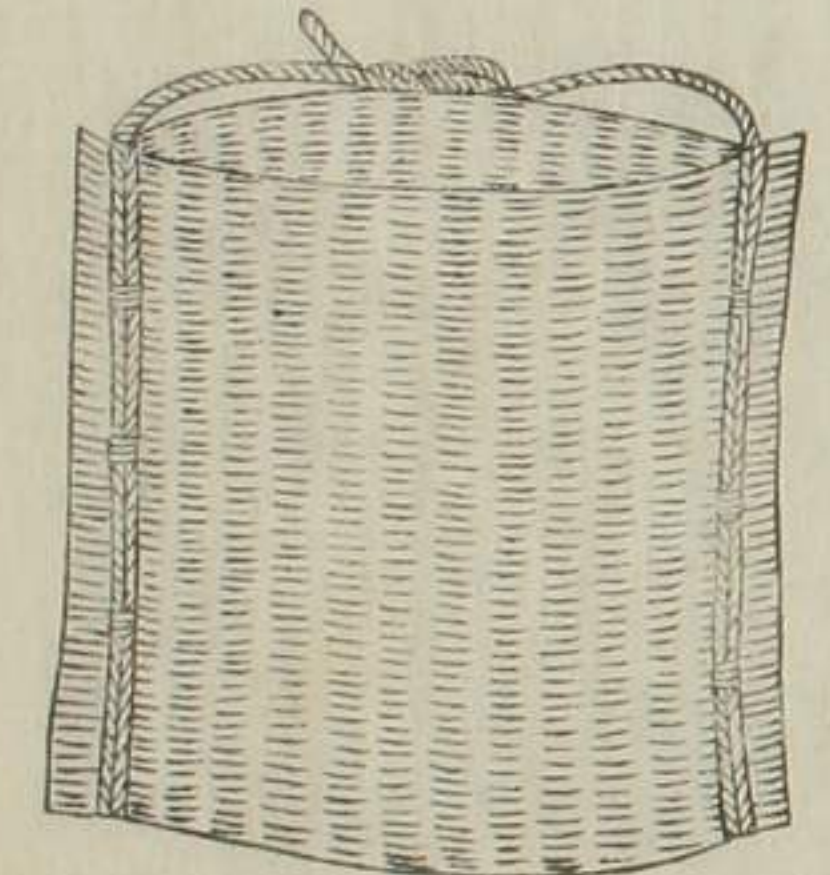
蕘筒



俵



蒲筒



裏

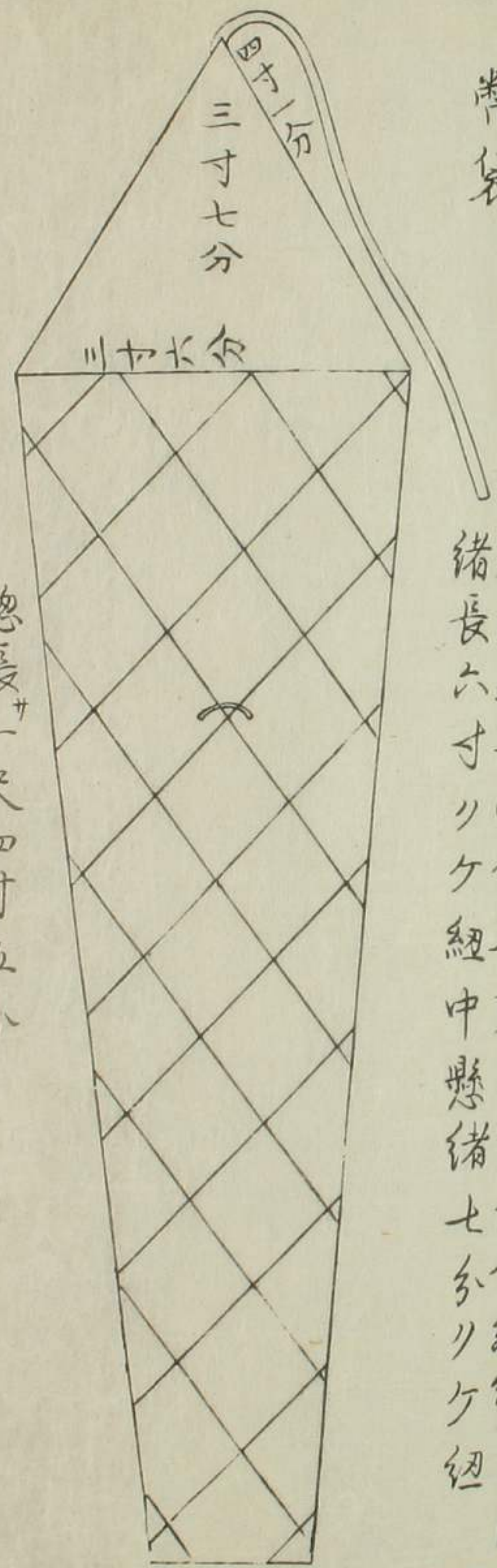


尾張熱田廟再興卷物子存り
 奥書に享祿二年己午二月吉旦
 とあるを婢と名えたるハ髪と
 さるを持所吉の風とてうけ
 さし結糸衣被又ハ何とてと袋
 子いきてるをせしとて次ハ
 側仕の女ある一ハ髪と髪より
 白布とて頭と輝ひそ布の裏
 端と右右に垂るるハ即今も程
 言の女は癖あり主の婦人との
 被衣しそいといふる表衣と
 ふし市女笠とかりりり常時
 常人の女装おもひ認る一し



幣袋

表青地等の金入裏布白但金紋紗とも用
 緒長六寸リケ紐中懸緒七分リケ紐



惣長一尺四寸五分

万葉集千を奉ふた神乃みさりふ幣袋ついでいとふ命は
 おとちりぐぐめ おちちりい即父母ありて古く神子
 縁といつわのその本意かく此とて遂に父母と愛敬あり
 の波おのりく河は阿はるれて遂に父母と愛敬あり
 せり又幣と心葉といふは赤心の表示ありし拾遺
 集に清くぬちきり結つる赤心ろぼく向の神を
 る儀かりりる後の中世ハ寛文十一年寺會子花
 立ふらるる花のぬき袋のつりや表子向ん

し之は撥まむりしハ楯鎧刀納り袋と成ふべて得袋と
いひしありし後又新嘉と呼ふ所のハ種々のもの包
こいるあり古事記ハ燧袋と又万葉ハ篋袋と云ふ
る者ハ行旅ノ具ふく羈客に納るものといひ又幣袋
あり後撰集ハ相つらひる人の阿かき袋と云ふ越へ
まかりありにぬき袋と云ふと阿かきハ旅人ノ衣
あはれむいふと成道祖ハ練る爲とてそ達の贖とせし
のそ初まふしハ田幣袋ハ古くハ絹布と尺ありつ
たるゆゑあり菅笠太政大臣のぬきと取あへしと詠ふ
ふハ袋ハ神子切つると袋に入れてもはとまはへん

ほざりしと云ふと今やうの儀別あんと事むりか
しく人ハ神り又人ハも云々としてむくハ恩贖と分明
又まはるといふとて風とや親こもらからのおはま
のなりんもてすらよも阿かきむりハのふとぬき袋と
んどに阿かきハおれと使と使の費ふくわらち
うらまーと源氏漢よとの竹袋と云ふは岩直人の夜急
袋とて今番袋と云韓文ハ襖被入直と云ふ又太田通灌
の辞世よきのと近頃ハ喜怒を入直し登んふし袋ハ
やうつさし是ハ縁ハ袋とて篝のやうなるものも
一説ハなるハ袋ハおのこの軀殼の事と云今まで

妄想と入置しとつとつや○宇治拾遺子越前國伊良
 縁の世恒々袋の米と流りよと輒と一斗のつぎや
 且しといふも又東鑑建久三年五月八日為 大上
 天皇四十九日御佛事頼朝卿百僧供養布施の中子袋米
 一也といひり○王肅喪服要記孔子云五穀囊者起伯夷叔
 齊不食周粟而餓死於首陽山恐魂之飢故作五穀囊○漢
 書東方朔云侏儒長三尺餘俸一囊粟錢二百四十臣朔長
 九尺餘亦一囊粟錢二百四十侏儒飽欲死臣朔飢欲死○
 唐史李泌請以二月朔為中和節民間以青囊盛百穀之種
 五雜組私夫と米囊太平御覽云古行者之食以布囊貯
 小かくせしあととるゆ

粮布囊為裏粮之用詩云乃裏餓粮於橐於囊傳大曰橐三
 圖會第餓可用盛種者淮南子急就篇等第皆所盛米穀
 ○字彙斷隋也載盛米者或布為之又米櫃也加良度計夫
 通計志櫃ふとつ三才圖會の穀匣あり方木層連
 也重筆筒のやうに引出ふて米と盛置のあり
 家裏集道行裏集山裏集旅裏集都裏集
 山行と集濱裏集同上海裏集旅裏集都裏集
 黄泉裏集宮毛集海裏集旅裏集都裏集
 裏糧子孟裏費鶴林玉露○裏ハ行人の持ものよ
 書言故事遠行土宜類書纂要送外境以本土儀
 遺土寶土毛土産以上東京夢華錄並
 蕃名

是等皆其家子然て某乃裏と呼つり詠ゆふり又何よて
 と包と持ゆふりしむたかくはいひし旅つとたも
 てらば饋ふどハ今と鄙人の飯裏とて釋きてかい包め
 るあり後ハ家裏とも江宮毛ともつてこハ伊勢 大神
 宮ハ参拜の人家口よきりて神宮の麻袂と名とし長鮑
 笠杓あんどの土毛と持歸て参宮の裏と親戚朋友子
 餉上りしより宮毛と名けしとそ今の贈答よあま引絲
 よて結紐ハ長伸鮑と副造鮑ハ打鮑の義よて鮑乃新よ
 いつりあ引ハ本ハ幣の事子起りの麻とけむに漚一皮
 と去りしものあてむら一此ハ麻あるとし躬恒集にあり

の白絲とてとる款とそとあといつり又万葉の哥よ
 伊勢の海乃奥津白波玉よちがけしとて妹娶あつとよ
 せんともあは伊勢乃宮笥とよめる也むりハ京師よ
 已伊勢東路よまうで下る人くと逢坂の買あて新と歸
 ち送迎てとのせし且ハ坂の嶽ありと新詠乃平安を
 禱てしむとに嶽をけなげてよ向てよ名此ハ履効ハ
 来入乃管侍とも坂迎てよ河津朝日わ々昔物江子信濃
 ちよ任して國ハりりくう村坂向乃登ふとといふ是
 かな逢坂てよ名此よしハ神功卷よと思ふたる今伏見
 の扇江乃錦画あとも土産の類よ呼つるハ此ちの

物也

麻須書紀〇和名鈔引切韻升十合器也知多少謂之量凡俗
 小量三合より一口二寸三分深一寸二分二厘條〇小量
 法五抄三撮強なり本邦の量 小半量 即二合五分
 厘七毛深一寸七分一毛あり或ハ口三寸五分
 寸五重深一寸八分五分者ハ非也 升 即十合あり口
 或ハ深二寸八厘とる者ハ非也 升 即十合あり口
 寸七 五升量 の時 末稻春得米五升とる者ハ非也
 分 米と一斗の料よせしむ 七升量 口九寸四分七分
 の方一尺五分深 咸大升 要政事 大升 古の代格〇今梅
 五寸八分八厘

と受とハ二升五合と受とハ三升と受とハ七升五合より 減 斗桶

量 武書經同律度量衡律歷志量者侖合升斗斛也〇唐高祖
 二百粒と容る之と侖と云 大斗 大量 以上漢書貨
 註大斗者異於量米粟 大升 說文斗 斗 月令集說
 之斗也今俗猶有大量 大升 大升也 斗 斛也
 斛斗 文獻通考文思院造一石斛斗 佉梨 翻譯名義集天
 用次印下諸轉運司依式製造

著名

凡量斗の起率ハ秬粟より積出る者と云々次第圭抄
 より始る或謂撮ハ四圭して二十四粟三指撮之の名也

嘗て試子三指やて米粒と撮子殆と三十顆又及つて

量斗積 斛俗作石十斗よて二此云佐加亦云一石 斛の

此方唐宋以来ハ二斛と石とつて 斗俗作斛十升よて

此云波古亦云曾波加利 即十升 十合よて二万此云麻

須即一合 十勺よて二千此云小量 勺舊作倫俗作

四十粟 此云多登須蓋手一津也亦云一掬手四抄よて二百

盛の事よて京升二合五勺也又一升つて十四盛よて一升と

一升ハ京升三升五合也又一升つて十四盛よて一升と

ありて手器ありハ八丈ハ古の方丈 抄十撮あり漢音廿

サいと呼ぶふ加子撮の字と誤る多し 撮三指撮之

の名此云保通亦云一撮圭 十粟圭粟の名ありて今

麻須とハ倍より勺抄と倍て升より斗斗より斛といふ

とてより吾 邦量と制の法ハ一人一日の食糧凡糶

米五合是穀ふして一升よりより十合と一升とよるの

糧積よ出るなり又軍陣の糧積ハ一日一人よ米六合水

一升塩ハ十人よ一合鼓ハ二合えといつり斗を波加利

と云ふとはいみしき米と糶は必秤よて懸るるに一秤

ハ即一斗よりよりおしよわ斛佐加と訓おと扱め漬と

おれしく等級と懸て陞おと升斗と倍て積が六とし 隆実

の考よ一扱ハ六えのあしふん位の老てハ朝野羣載又

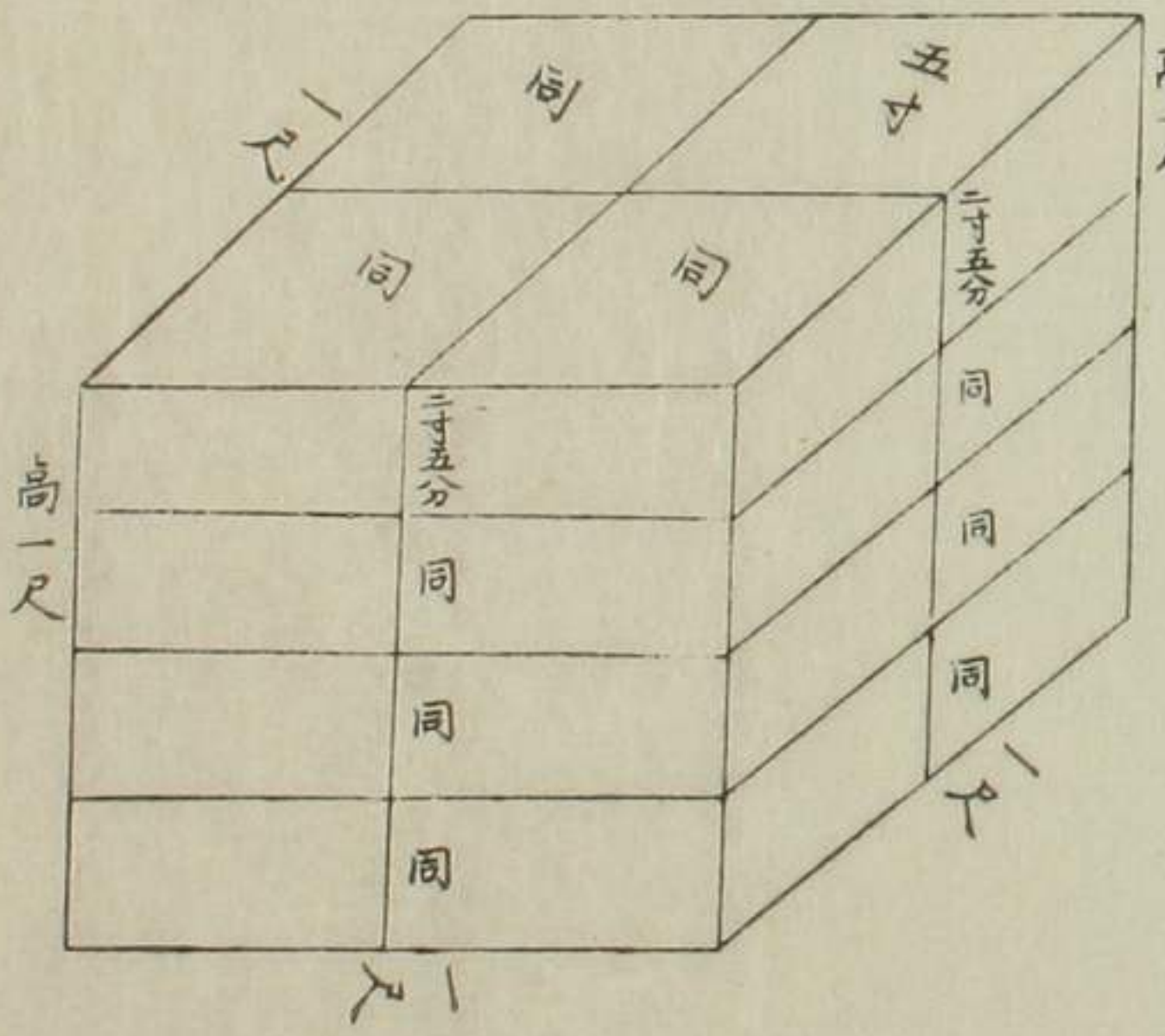
とくじ通もくろしき此扱ハ位階といつり

米百坂四十坂とあるを併かぐりてし美葉は百積の
船とてハ即百斛以上と積載船とて々も船の大き
度て某百斛積といふハ古語の遺もるなり書紀の千斛
と訓古事記のハ尺讀て麻佐加といひし又十度とも
えて曾波の反依あり佐加ハ曾波加利の畧ともい
十と曾と訓ハ五十八の六とし按ハ漢志の升者登
合之量也成也進也と源せしと次第は數と登りて
てあり麻須とも佐加ともいふハおのりりて之を合
るとるるし舒明紀十二年十月始定斗升斤兩文武紀
慶雲二年始造度量賜諸國元明紀和銅六年領下權衡度

量於天下諸國桓武紀延曆十七年十月勅度量權衡先有
製中升尺等類就大截省依法平校求絶奸源若違此制實
嚴科令曰量十合為升三升為大升十升為斗十斗為斛雜
式曰凡度量權衡者官私悉用大此丈量小量の制ありし
也蓋慶雲より和銅よりあるまでハ所謂古量なる者あり
今のハ合量乎蓋古量の一升ハ合量より九合六勺四抄
許今紀抄ハ八升あり此量より合量の半一
斗と料ハ一斗二升ありと一斗一升ハ
合三勺ハ扶桑畧記後三條天皇延久四年九月廿九日
詔斗升法可據用長保例この律代ハ穀倉院の宣旨升以
造り玉ふと東齋隨筆ハ云ふなり
大日本史曰後三
條天皇欲審量制命

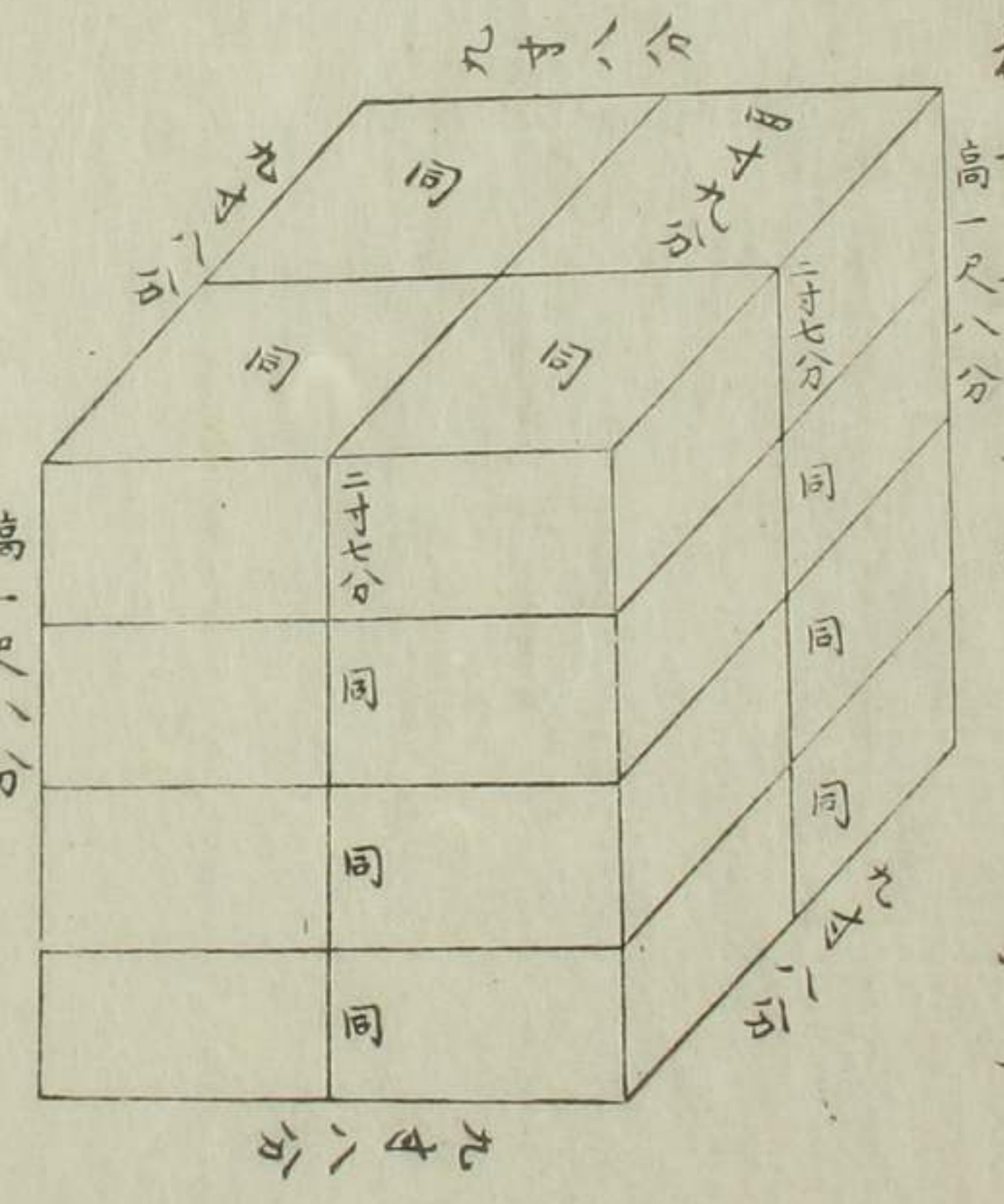
新作器使藏人頭藤原資仲督之帝自抽簾截竹為之準及
 成資仲等率藏人出納小舍人量殿沙試之而取穀倉院米
 量之後世遵用謂之宣旨升又造方櫃容一斛以石為錘衡
 其輕重器傳在穀倉院按東齋隨筆曰斛八斗也又石と
 直と斛の音と讀たは久の頃穀倉院の斛と造り
 子始る也○伊藤氏曰大學衍義補始皇平六國之初書云
 一衡石丈尺所書之石非鈞石之按子中古の量方寸深
 石也後世以斛為石其始此歟
 二寸也と云者所謂宣旨升乎今或ハ江後西天皇實文
 九年京升寸法一同子定る俗亦今量と云方四寸九分
 深二寸七分也中古の量と京升と料合とる子京升ハ米
 六勺程おほし官より下給ふ米糧ふと子京升と云るハ
 即寛文中制らるる公量の六とあり
 古升ハ口五寸深二寸五分是一分四方の物數六万二千

五百あり是と古升の法と云る也今升の六四八二七と
 古升乃六二五と云て除ハ中餘二千三百二十七あり米
 子積ハ三合五夕強あり
 之に依ハ古升の一升ハ
 今升乃九合六夕四抄ふ
 了也
 十六の一分五寸四方高
 二寸五分是古量一升の
 製也



今京升法其積ハ陸六十四坪八合二勺七抄拾肆六十四坪八合二勺七抄萬捌六十四坪八合二勺七抄千貳六十四坪八合二勺七抄百漆六十四坪八合二勺七抄拾萬々實積算法
 成形成說卷之十四
 十五

古制は高八分増て一尺八分とて同徑二分減て九寸八分四方とて 其寸積千二十七坪二分三厘二毛 此石敷一斗六升 分坪百三十七坪十二百三十二坪十六割一分六厘四子八百二十七坪是今量一升の積也 古製一升の方五寸と一分減し今四寸九分四方とて深二寸五分と二分増し今二寸七分とて 升法六四



八二七 但口内斜子鍍梁^{カチツル}あり此内梁の積減少^シし今京升の梁上^{ツル}闊三分下^{ツル}闊七厘高二寸長七寸弱なり右梁と一分方の物敷^{ツル}積ハ二百五十九也一升の積六万四千八百二十七より梁積と減^{ツル}はハ千六百四十五百六十八とあり此今升所容^イの實積なり 民部省厨升十合升あり山科升東大寺十合升其名同しかゞざれとも受^{ツル}所ハ八合の十合升にして雜令所謂十合と升と異なるの一升量也但古升の一升二合ハ今升の九合六分條^{ツル}より加茂祖所謂九合升あり此より四勺と是^{ツル}て々の一升量とて

民部省厨升火印

民部
省厨

拾合

宣字升

火印

神戶氏藏民部省厨升受

山科升
子同し ○又古量又宣字

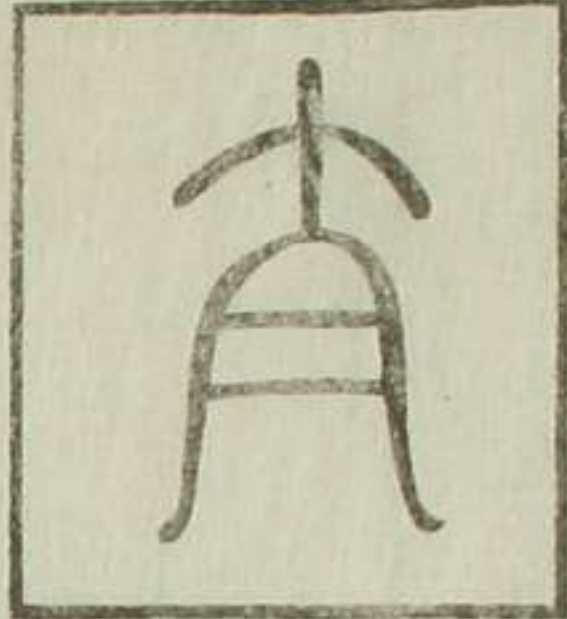
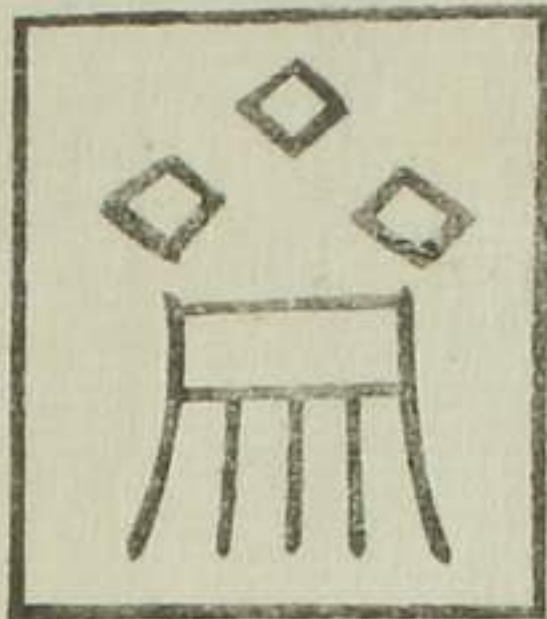
印烙の者あり疑ハ即宣

旨升ありし又古量又

深一寸五分 徑二寸八分

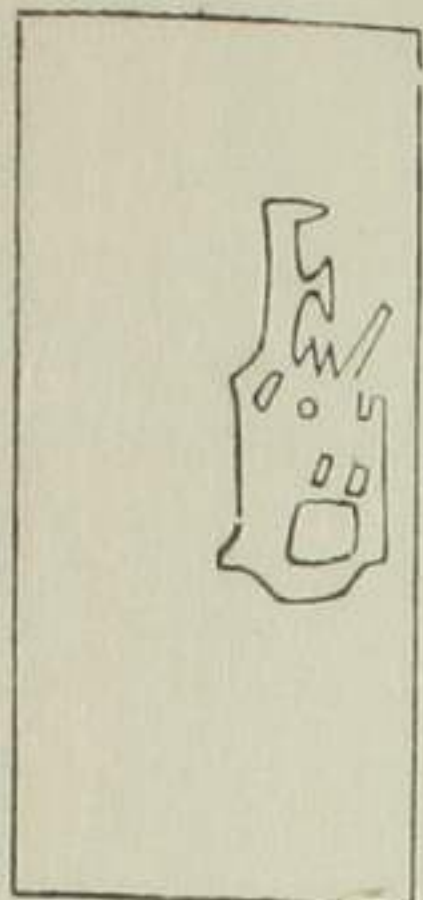
五厘の者あり是火印又

太孝齋の三字あり



深一寸五分
徑二寸八分
五厘

横



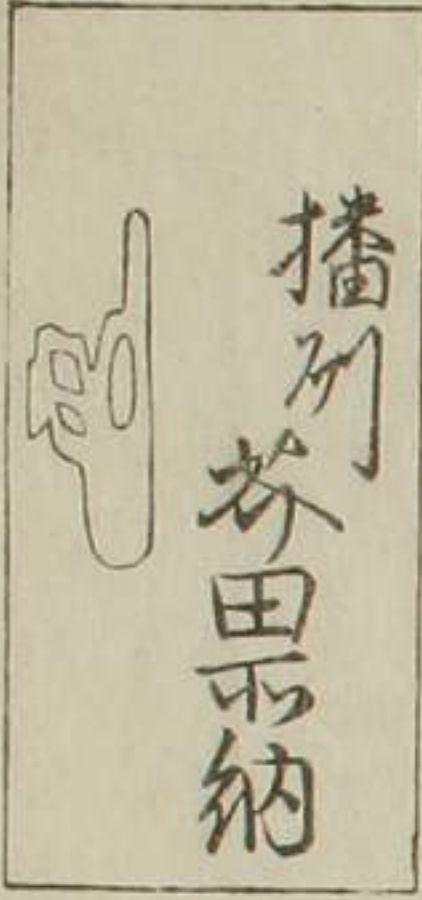
升中 播磨國姫路芥田氏蔵升
火印

底

或曰相模澁倉鶴岡安藤升あり廣五
寸七分深二寸二分銘又天正十八年
安藤判あり即此升小して今澁倉
中社寺年貢所納子用なり又曰伊
豆相模字子原升と云河内京升よ
り大あり當時安藤豊前守原升の
字ありと云ふ此升の事ありし

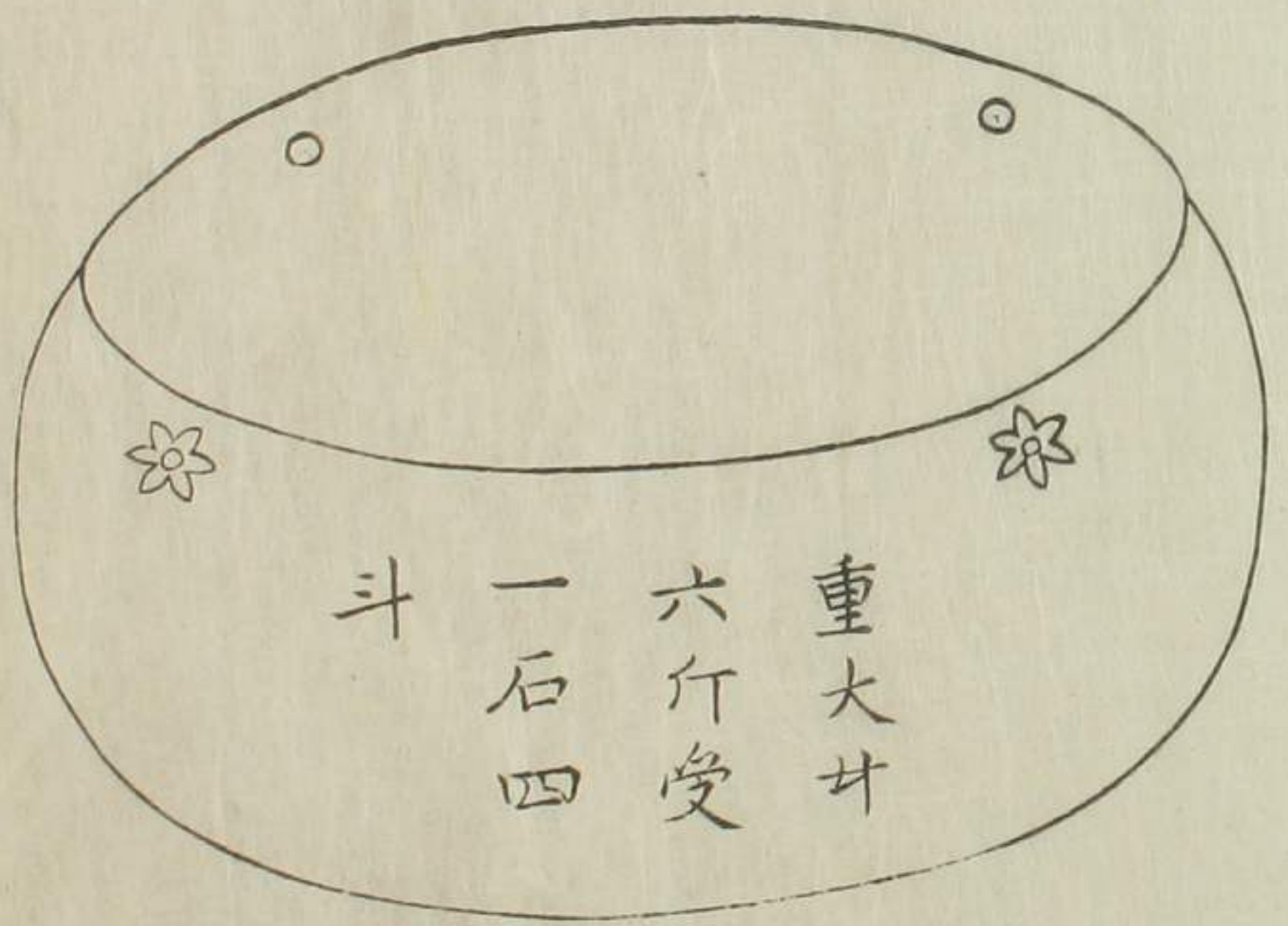
播磨
芥田納

横

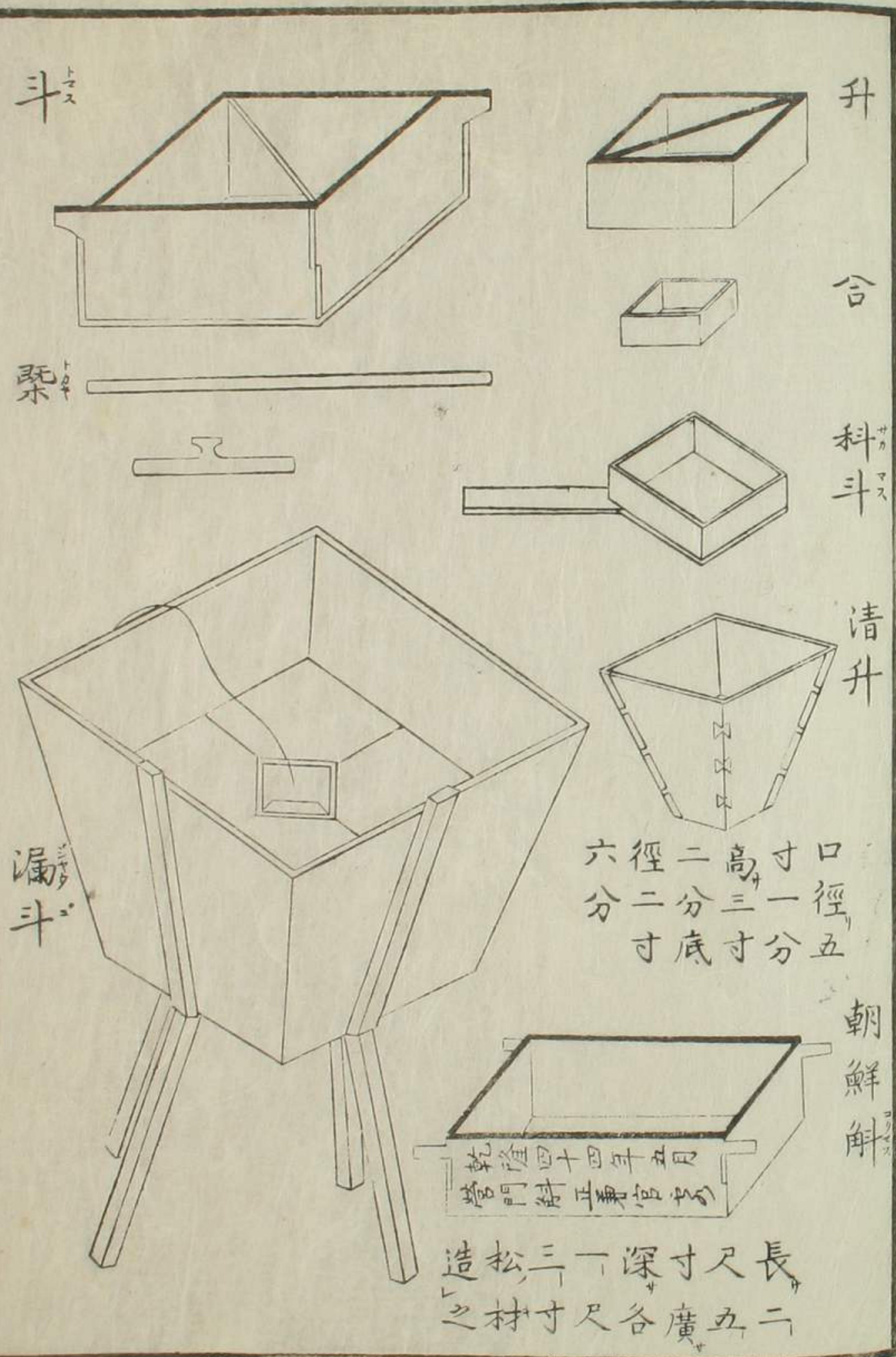


大寶量 和銅量 以上續紀
 天文十五年所造 今錢升 天文十六年二月田券子見
 升子て八合五夕 今升子て六合六夕
 七月田 本供量 今升子て六合六夕
 券子見 今升子て六合六夕
 上量 今升子て拾合量 今升子て八合六夕
 一升六夕 今升子て八合六夕
 同上一〇本供量以下南 稻荷御出講量 東寺稻荷律會所用今升子
 量 一升一合六夕
 十量 即令格子謂大升也 西州北國等皆大升と用う古
 今名所小差河江源武鑑子依く本義實此との越造也
 る大と見んるり〇大和法隆寺子て太子量と呼ぶもの
 河子九寸五分に三寸七分今升子て五升一合子夕強と

入也
 又同法隆寺子釣
 量とて重三貫三
 而目餘の銅斗の
 已是南史蕭思話
 傳子思話常所用
 銅斗といふの類
 なる類然とも
 聚量斗と見え



銅斗口
 圓徑二
 尺二寸
 五分腰
 周七尺
 八寸三
 分深一
 尺四分



蓄名

畧雄

家量 而以公量收之

私升 朱子行狀本令人韓

私斗 國經

武佐判

江量 亦云近

遣升

發揮 律原

國量 一國くの量と

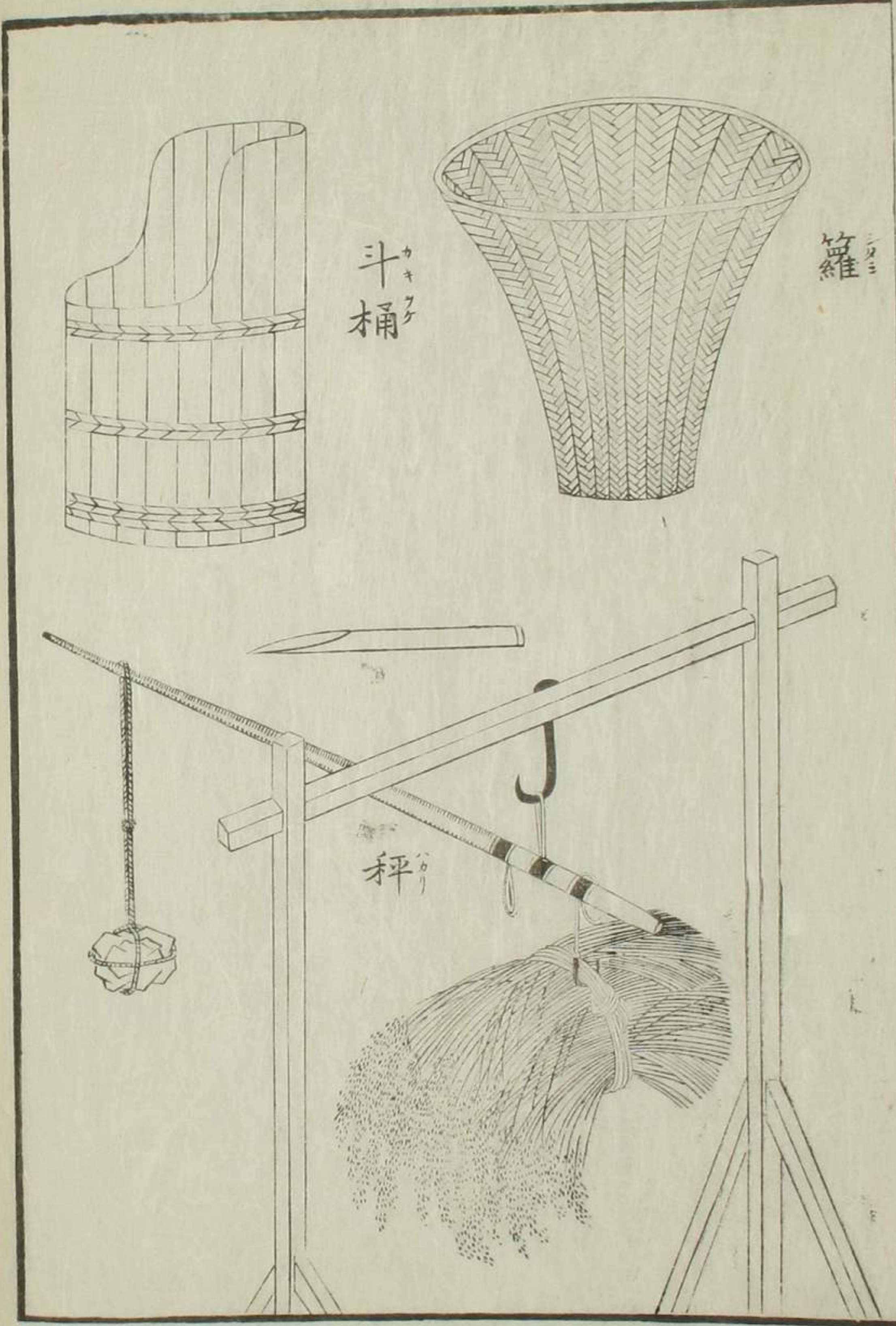
手量

俗は酒と酌と手盛と云

九升入りて一斗量あり

江戸増上寺の靈屋願代官の方に一斗量あり縁子渡の
戸中子梁河り下の四方に掛り切りけり是と云
量と秤斤又一斗一升入の大量あり又九升入り河り俵
ハ四斗二升入りて收納の時一斗一升入りて之の量

武佐判量ハ近江武佐より出ル八合入ありぬハ八合量
 とも唱ふ 武佐ハ近江の地あり兼良公の室の菟川記
 けとて武佐の名ハゆりり 天文十三年依々本義實百
 姓の租と納又二合と減して收り為ニ近江武佐の倉ニ
 て造る所是不姓と存垣の志ありて末代の惠政と称せ
 已孟嘗君傳ニ田常收賦税于民以大斗出以小斗收濟民
 歎之と云り義實亂世費用不給の中ありて如斯の惠慮
 あるハ其の政蹟とありふし終に終ニ或ハ之と云
 田量とも唱へて不田之成ハ万石の地と十万石ニ料カシハ
 して八合入と用ぬしと云ふハ愚多し其量計ハ



斗桶

籬

秤

今々の眼前まで取あつたふらのあるとかや地と
 して何れも一民の信儀をきやハ又一説は案田諸家の製
 る所より後世小量と印烙なきものとして漫々びとんと
 呼ぶハ元々吾判とあるもの証也と云々なり武佐判量寸
 法方四寸六分半深二寸三分八厘半強
 甲州判量甲斐國にて用事あり
 武田氏領地の時より始り云々 旅籠量京斗にて七合
 五勺入るなり 同半量京斗にて三合七勺五抄入るなり
 同小半量京斗にて一合八勺七抄五撮入るなり此れ一國
 まで行る國量不々多しといへども尋常なるなり
 酒量サカメ一名柄ハ附量ツケ○參伐星の形邊に似たり故に酒量サカメ星
 の名あり此酒醋油子と料味今の斗量は兩柄あり

こと猪相イノのさるさる俗に量一とて一杯と云ハ蓋酒量
 より出づる言にて今一杯量と云ハ一升の半分入るなり
 水量製 一合 一口二寸一分深 二合半 一口三寸一分六厘
 三合 一口三寸九分六厘 一升 一口四寸九分
 五合 一口三寸九分六厘 一升 一口四寸九分
 油量 一口五寸二分深 三寸一分
 科斗 史記張儀傳○即酒量あり伊藤氏 大斗 詩大雅疏
 尺謂其柄也蓋從大器挹之於樽用此勺耳○東都事畧宋
 太祖祝曰酒者天之美祿何惜不令飲之謂王審琦曰天必
 賜卿酒量酒量ハ酒の飲量といふなり
 登加伎 和名 量懸 亦云 梁 亦弦の字と用俗云渡金量
 芝田録に改梁 梁 亦弦の字と用俗云渡金量
 斗格類書 斗格類書
 和名鈔引禮記注梁平斗斛者也○ 斗格類書
 說文杓平也漢書以井水準其槩也 斗格類書

蕃名

粟寸法

一斗量の粟ハ二寸六分

七升ハ二寸三分

五升ハ二寸二分

一升ハ一寸二分

或謂粟元定式よし

の掛るけ長く作らば此云寸法ハ粟の本口乃徑より凡斗量ハ櫛材にて作らば一升より下ハ其端を執て押及を故杉并等凡俗間己ハ粟と短くして作らばハ壯くして平らうと量取らる盗とひて免す○明律

云凡各倉收受税糧聽令納戸親自行粟平斛交收作數支

銷依令准除折耗若倉官斗級不令納戸行粟踢斛淋尖多

收斛面者杖六十若以附餘糧數計贓重者坐贓論罪止杖

一百物部氏解曰納戸ハ多の百姓の中より一人を以て彼所の倉場より其者自外粟とめて

るあり○踢斛ハ量と足して踢て多く入やうとある斯

方のおとしゆは此の數あり○淋尖ハ量の上より米

と大はし掛て合盛高料とらるあり斯方ハ按西

てあえ米起料ともえ皆倉役の不法と糾け也

土ハ其量法一向に定規あり大率と粟ハ周一升此方

ハ勺九抄條あり四升と一豆と博雅ハ升四四豆と一

區と一斗六升此方今の五區と一釜と或作舖六斗

斗此方今五升二釜と一斛六斗此方今一五庚と

七合四勺八斛○左傳ハ十釜二鍾と秉と十六斛此方今

鍾と五合二勺○小爾雅ハ二角と豆と二釜有半と庚と

漢書ハ牛一足と三十六斛と駕と本邦の一

石六斗と抵と唐宋以來ハ五斗為斛二斛為石故西

土の一斛ハ 本邦の五斗餘あり度量衡考を按じ
 漢一升ハ此方今の九勺三抄一撮二圭九粟 漢一合ハ此方今の九抄
 三撮一圭二粟あり漢一勺ハ此方今の九撮三圭一粟二あり 魏晉一升ハ此方今の
 一合零三抄 宋齊一升ハ此方今の一合零八抄 梁陳
 一升ハ此方今此一合一勺八抄四々三 隋一升ハ此方
 今の一合三勺九抄四八 唐一升ハ此方今の四合一勺
 八抄四々三 唐詩ニ謂李白一斗詩百篇 宋一升ハ此方
 今の三合二勺零 元一升ハ此方今の四合六勺三抄
 明一升ハ此方今の五合七勺一抄四又明新製の五斗量
 といふれハ其一石ハ此方々の四斗九升九合零七抄

清一升ハ此方今の五合八勺四抄七撮よりあり 朱氏談綺曰
 彼の宋一斛ハ我の五斗八升四合七勺あり 唐山の升不
 同より餘姚の升ハ日本の四合と一升とを是城郷升と
 云官升ハ六升と一升とを是と云ふ河内南の升を
 日本此ハ八合五勺と一升とを是と云ふ河内南の升を
 勺はと云ふ一升とを黄鍾の律より出づる升を今かえ
 りて日本此の升あり 按今清國部升ハ戸部より頒出
 其式様江南一斗入の升をけ年貢上納に用う即 本邦
 の六升をとも容民皆に用ふハ各省より一二合の差あり
 又宋一斛ハ五斗より二斛と一石とを重百三十斤儀
 依ハ通例五斗儀より一石代限凡三十五六各一升ハ此
 方の五合強と云ふ凡西地の量ハ口瀾く産穀し又箱の

だくとくして四方の外と鑄て鍍してあり沖繩人曰
 福建了市店の私量ハ竹筒より西川氏曰西地升尺交易
 の諸也何と斤量とい賣買にあり長崎へある者和蘭の
 如きと竹筒の急とハ糧米の多少とハかる彼一升と云
 りる者 本邦の五合弱より其餘外表法國管量あり中
 井氏逸史曰朝鮮量の一斗當我三升五合以十五斗為一
 石當我五斗五合量の韓語とシウテイと云

大量オホハカリ 大量の名既ハ古事記ハあり大殿祭祝詞ハ天津
 御量ミカドノリヤウとあり是其名の自て出る所あり今俗斤兩と云

稱シヨウ 延喜式ハ蓋大小ハ通スる名あり日本寄語ハ等子
 上の物と云即秤あり又 加良波加利カライハカリ 漢語ハ鈔ハ權衡ハ訓ハの
 天平と云即秤あり又 長首上毛野同氏多奇波世三世孫久比崇峻御世被遣
 吳國雜寢物為交易其中有吳權其名云波賀理久比奏曰
 吳國以懸定萬と云是即加良波加利なりハ此皆 知伎利
 即小秤あり東夷にてハ伎と濁音ハ也ハ一ハ也
 等秤ハ宋太宗淳和中初て製とあり也と云 斤兩即大
 尺亦斤量と云

秤シヨウ 音稱廣韻正斤兩也又云俗稱字ハ唐韻稱音再知輕重
 也ハ按ハ文獻通考云淳化三年秤無準而造各三毫懸
 星以準之志ハ加ハ了ハ明方ハ同ハ籙奎律ハ體ハ載ハ唐ハ包ハ何賦ハ得ハ秤
 送孟孺卿詩云鈎懸新月吐ハ衡ハ察ハ衆星ハ隨ハ受ハ唐ハのハ時ハ既ハ子ハ秤
 二星ありあり宋ハ其準ありハ權衡ハ尚書ハ疏ハ權衡ハ一物
 りハのハおハつハふハさハやハ權衡ハ也ハ稱ハ上ハ謂ハ之ハ衡ハ稱
 鍾謂之權ハ律曆志ハ衡ハ平也ハ權ハ重也ハ數ハ度ハ行ハ子ハ權ハ衡ハ之
 用有ハ二ハ或ハ用ハ斤ハ或ハ用ハ兩ハ類ハ經ハ附ハ翼ハ也ハ衡ハ有ハ小ハ大ハ總ハ名ハ曰

衡小者曰等大者曰秤凡稱の槓ハ衡也重ハ即權也
 又重の事と錘駝砵法馬分銅と大小おぬし
 扛秤類書 槓秤珠璣 扛稱日用 大量 大稱以上郷
 籙要 籙 籙

蕃名

古語拾遺曰令手置帆負彦狹知二神以天御量伐大峽小
 峽之材而造瑞殿兼作御笠及矛楯天御量ハ度量の古名
 あり手置帆負彦狹知ハ即工匠の始祖とて工匠ハ手組
 小て物と思案するハ必手と拱あり今作物の精妙と
 稱して大工とよと置といつり手置の神名亦ありい合
 せし按子呂氏春秋黃帝使伶倫造權衡度量衡數ハ黍
 より起る十黍と累とし十累ハ銖六銖ハ鎰四鎰ハ兩と

凡六百黍一錢五分 本邦の黍よりて百粒の重一分

一厘五毛積て千二百黍よりて一錢五分とあり錢ハ今

の字よりいり文獻通考子錢作叙盡作冬ハ市井下流の俗
 書ありといつり律原發揮曰寛永中鑄寛永通寶錢每一
 箇重一錢故俗稱一錢重謂一文目又一字とハ一錢
 の四分の一ハ是二分五厘とあり其率

黍累 銖十 鎰六 兩四 斤十六 衡十 鈞三
 石 鈞四 鼓石 續紀和銅六年四月頒下新格并權衡度

量於天下諸國按て此より以前舒明紀既ハ斤兩と定ら
 れしと云々ハ和銅の時ハ更ニ新模と頒れしか
 已令曰權衡計四銖為兩兩為大兩一兩十六兩為斤按て
 催馬樂歌又夏引の志源ありとありと云々と鈔

二七ちかりは七兩のよし説文二春分禾生夏至昏景可度禾有
 利と讀し秒秋分而秒定律數十二秒當一分十
 分為寸其重以十二粟為一分十二分為銖と景と度と
 今凡四匁と一兩と凡四十兩と唐一斤と凡白銀一兩ハ
 四匁三分十兩一枚と凡即四十三匁凡金一分重一匁一
 分九厘慶長一分金重一匁二分〇一兩ハ四匁七分六厘
慶長小銀重四匁八分文金小銀重三匁五分〇黃金は大
銀也天正の初に製其一枚金は十兩銀は十枚也是より
前ハ砂金也今の大銀小銀ハ文銀の初に製る昔の金と
別也今小銀六匁大銀一枚七兩二分又一兩銀十枚や
 又紅花一斤匁五倍子八百三匁二百六匁是と唐
 目一斤と云百八十匁是と當銀一斤と云又二百十匁沈

番一斤二百五十匁鉛錫の類又二百二十匁と平野目と
 云三百匁と分銅同ふどいふかまとし新井氏曰唐山の
 石ハ秤衡よそむけり村は用う一石の重百廿斤ハ本
 邦乃秤よそ十九貫目あり伊藤氏曰石本權之名所謂銖
 兩鈞斤石三十斤為鈞百二十斤為石是也豈秦漢以來因
 其所容之重遂以名量歟石字亦作碩拓今按ハ秤又稱量
 と録ととと東福と懸穀禾の輕重と量は收納する所ふ
 且延喜式ハ小税大税斤税と云わりそ小税ハ以一把為
 東大税以五把為束と云りて斤税ハ其わらふとと秤よ
 て收と懸税と云又斤税ハ大斤大半斤ふとの別あり也

古歌^{カケ}之熱^イ福^イのちりり乃^ハ此^ニおもくとも^ハ大^ニくは^シ民^ノ乃^ハ
 うまへ^ハ阿^ハ〜^ハ今^もも^も米^と斗^をて^量を^債保^りし^て秤^を
 と^りそ^入入^る多^少を^究心^じ但^し上^田乃^は米^ハ重^しなる^量
 目^少し^とい^つとも^ハ斤^同と^ぬむ^り下^田乃^は米^ハ量^目ハ
 重^く斤^同ハ^輕し^大約^米斗^をて^秤を^保り^して^斤ノ^秤を^知し^權
 石^兩晒^まより^て爛^漚て^輕重^の凡^秤錘^ハ京^以東^ハ江
 戸^守隨^某り^製る^新京^以西^ハ大^坂神^某り^製る^不同^して
 西^東互^ニ通^用さ^るふ^とと^以て^凡私^造斛^斗秤^尺
 尺^不平^在市^行使^及將^官降^斛斗^秤尺^作弊^増減^者杖^六十
 工^匠同^罪

手^タ度^ハ舊^事紀^有手^タ量^大小^及音^聲巨^細○瓊^牙拾^遺曰^長量^也
 伸^兩手^ヲ為^一尋^ノ長^度辨^色立^成尺^竹量^也○谷^重遠^曰凡^造鐵^尺延^喜内^記式[○]
 俗^ニ曲^尺と^謂て^金尺^と呼^はく^るか^物指^也
 度^引也^所以^度長^短也^指尺^文公^家禮^也
 蓄^名 ハ^ント^メー^ト
 度^の數^ハ忽^{より}起^る引^丈尺^寸分^釐毫^絲忽^{あり}寸^ハ
 名^有て^忽々^ハ忽^絲十^毫十^厘十^分十^寸十^丈
 十^尺本^邦の^舊尺^荷田^氏度^制畧^考曰^古の^吋尺^ハ大^小あ

即式の鏡尺二寸
 同裏 曲尺一尺四寸
 文尺 曲尺八寸
 夏尺 横黍尺八寸
 漢尺 曲尺九寸一分
 唐尺 商尺
 宋尺 曲尺一尺一分
 明曲尺 尺商唐
 天竺尺 寸曲尺一分

志多美

和名鈔○新撰字鏡算と訓めり蓋注算あり
 俗物と俗注書き志多免留の詞あり
 登保志 亦上戸と俗と云革と竹とあり元來納税所の用
 ささしり乃撃あり編竹の眼と粗くして米と俵と字し
 量地の前説と用るり

入るる外海はやうに
 乃と加へるとさうさうあり
 量乃上は跨りて容のさうさうあり
 やり上戸のさうさうあり
 有命限二十盃と大戸は上戸と孫皓每饗宴人以七升為限
 能飲有大小戸之稱云々吳志孫皓每饗宴人以七升為限
 小戸雖不入口並燒灌取盡此三國以前之事既下戸云
 云注子以口多少分上下也持統紀上戸中戸下戸云
 籬音羅揚子方言陳魏宋楚間謂之籬又謂之籬
 籬又云漸箕也○廣雅箕
 一名曰筴曰箕曰箕曰筴
 蕃名コールンテレグトル 籬 テレームル 斗 槽漏
 是との亦字鏡志多美とハ即澄箕とて物と漉の

青草と来て蓑笠とし新羅の志茂利の雲を居玉
 ふふと神代紀もあつり此事と繋りし様といつり為家
 の考に雨衣笠きて内へ入ふと神代紀いふより思とい
 ふふと申昔もあつては上下あつて蓑とて思ふと申す
 法拾遺いまいはむく下野武正といふ舎人法性寺殿
 よいもの大風大風の時に武正あつたかのうと志をよ
 蓑笠とて蓑の上又縄と帯にして樽笠乃うへと又お
 と如しは縄とてあつて申すつきてりや杖とつきて走まを
 といふおふふとあつりあり かゝ志といふ今の肩衣袴はあつ
 し古事記に上下衣服といふ又
大和物伊良部少将 深州帝はおくれありては控人と
 あり我装束よりみふと右刀まで皆すきやうと志ありあ

といくらもあり或くちびさの言又上下とをのりつ
 八義もあつてあつといつるハ却てぬ言と志ぬはつと
 不延喜式凡供奉行車駕輿丁駕別二十一人 中笠蓑請内
 畧 截寮又大神宮式笠縫内人等供進蓑笠 ○公事根源又む
 りは皇宮又雷三つと高く鳴る守護のつと將監以下
 皆蓑笠と志て南殿を侍ふと雷鳴陣と云 令義解曰諸
 道置驛其乘
具蓑笠等各
 準所置馬數 ○隠蓑隱笠といふとハ 神武東征の時
 時子推根彦と弟猾と老婆の形を為し蓑笠と被ふハ敵
 の陣中と難くはぬとし故事と出つり拾遺集に隠蓑
 隠笠ともほてしつあつと人又知れははし又
 阿衰の事著聞集と和泉お記忠て稲荷一ふりもつと田

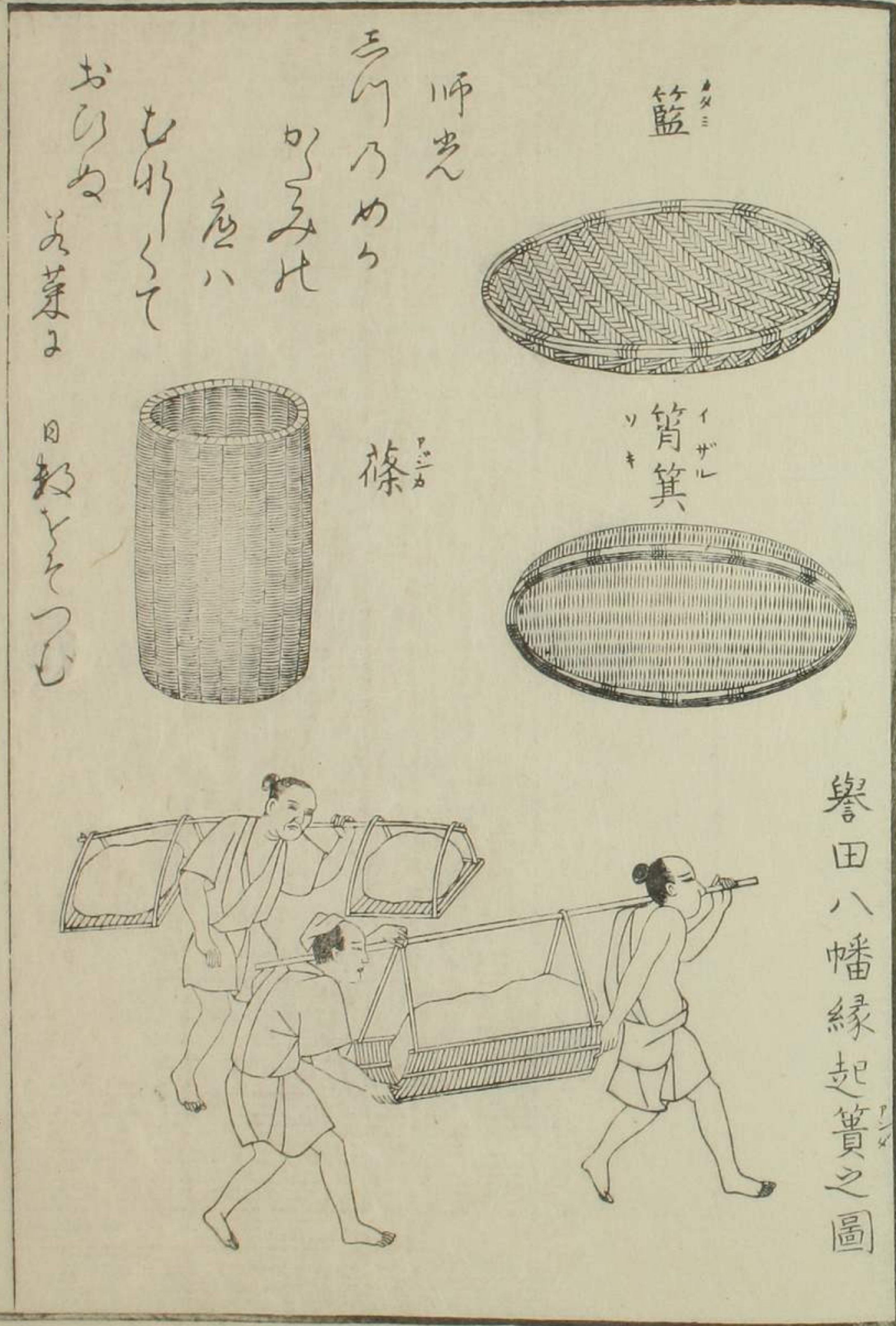
申の神の前で時雨のきりぎりすききと申
 のるり又田かり童のあどとつふれのと儼然とまてま
 かりよるり下向のちとれをれはあどとつ
 しどとやてあり萩の志とりに田にけし物衣のみし
 き物也旅乃装束也又けしといと物といつり按は是今
 の雨衣をて候又青深とつふれの相似つり常典謂襖
 と阿字と候はとけまといふとの訓ありは乃素襖乃
 候はえ、衣、服の初製を申、おきてハ、高買馬子まて
 とこの服是りるゆりある神の御代は、ま、と結て人
 の服とせしといふと、あ、ん、阿、字、と、な、り、起、る、所、あり

けり今ば素襖とつものには此名を留めり人虫、身乃初
 装束れハ襖と云ハ、蓋青侍、青女、とつふれ、り、し
 武門よとと頼朝卿院参の時舎人四人、崩末の狩襖袴と
 是乃と何の明月記正治二年舞人馬居、飼舎人二藍二人、蕪、芳、
朽葉二人、青此青とあつと青色の襖の事也、襖とハ狩衣
 又裏はつと云素襖むりは布襖といひて、袷衣に裏何
 けり、とそ裏とやりて、單こまとあつと、り、ねて素襖とハ、候
 けり素ハ、空肌スダガふと、り、ぶ、と、く、ひ、と、と、り、言、あり、書、紀
 子襖子と阿字、之と訓、ま、り、字、音、と、ハ、阿、字、と、あり、つ
 さあ、と、つ、り、然、と、字、音、假、字、つ、ら、い、よ、う、の、韻、と、と、な、つ、し

て申國言の如くついであやるとも又和訓葉と素襖の
 音と軟しうさうさとの二大家のいり考へ申す
 りるもやかくは事いと多り也又襖と字鏡と去るも
 と別ううハ上者乃繁乃衣といふもや万葉の奇に
 ひまつゆきとあふるを流乳山ゆりうとていふ
 ありあり

古

書紀の凡物と盛容とのと古とつゝ籠箱の類
 皆多ふに書紀の篋と古の初ハ蓋は縁多
 籬太平記の當時の籬ハ今持籠竹持籠
 の竹輿乃事といふり
 塵取糞塵と取除くもの
 所々今の鉤景通棹乃出
 夫利西



簀亦篇におかきやうよひいふん今簀の左衣の
 竹と流してふくして塵土をもち運ぶやうよあし
 とハ持籠と呼り即土鑿あり又左ノ端とハハ竹
 輿よそ々の轎輿てあとのふくといり

布古 夫木桑葉の器乃ふふ多ようけてり

輕籠

番 音本古文番左傳趙盾己朝而出有人荷番自閨而出者
 註番盛土器以草索為之○周禮挈壺氏挈番令糧註番
 所以盛糧之器○晉書王猛少以鸞番為業○三才圖會
 番以蒲葦索為之○洞冥記李克自言三百歲荷草番
 蕃名 ダラーガコルフ

此の草具よてき用ハ前の簀ノ異ふと又番あして
 單ヒヤ子コ座ノのとわり四隅四緒と着て土及ひ米稭貨物成荷
 のおと輕籠とす

阿自加 和名鈔○蓋葦籠あり字鏡ミハ簀とよめり又篇圓
 一ハ糸いめく物とらわの
 草籠 今田家の者或背負
 篠 音掉同菰説文草田
 器 ○論語註篠竹器
 蕃名 コルフ

猫飼

加賀利 和名鈔 ○ 蕪篋及の庭燎と名とおふくは共子生
形の似まはとくくあり歌のりぐ日火ふくは庭燎

庭燎 ハ漢ハハハ地燭也火あといつり
音鉤亦作籀和名鈔引說文竹器也○按字典負物籠類

者操一豚蹄酒一盃
而祝曰既筭滿篋

蕃名 ストロローメント

此の紙縷して製するを負篋と云ふ元ハ脊子負ふ

のあり又中索して編と肥篋と云ふ其眼粗し農圃にて

駄荷とも負擔ともなりぬ其用一なり以蓋此の竹篋

ふぐく其形の燎の受骨も蕪篋の圈眼もと似るる力

えぬ字といくくせん

伊佐留 新撰字鏡 ○ 甲斐人ハ今と云ふつとせり

伊加伎 下學 麻笥 字延喜式 良計 辨色 立成 浅甕 和名鈔引本朝

と阿比志くくハ海笥の意或曰いふくハ麻縷ハ竹

笥と用うるりハハ又の縷者ハ竹器と云ふくハ麻

とつり 世字笥 物類稱呼 ○ 蓋麻笥の轆

笥 儀禮註笥 番種類也其容蓋與蓋同揚子方言蓀南楚

謂之笥 ○ 朱彝尊曝書亭文集偶探笥箒得舊聞數事

蕃名 マンチー

加多美 漢語鈔 ○ 堅間笥の畧あり箕ハ物と盛るるり

手籠 両柄あり 鉤籠 竹革籠

ふみハ一本のあひせりふみとんそり

苞鉤 俵懸

搭爪 農政全書上用 鍍鉤 帶襖中受木柄 狀如鑿爪 以標草禾之束 或積或擲以萬數 速於手擊

是米苞淺荷負る者 其扛卸の速る子 便る所

俵に繩子指と挿より 最速なるり 取置り 又繩針と

者阿旦俵と注より けふき繩乃 端と針子 紐して 其

約束子 便る所あり

擔股 股振 股棒 夜須

杖音又説文杖枝也 岐枝木也 受周禮註 杖刺泥中 捕魚 又杖柄あり

又杖柄あり

檐と依須とと 称ハ檐頭に 岐枝あり 本以用ひし 名飲

名鈔引切韻 椽屈木為之 和名佐須 衣とほる 佐須衣ハ

の椽乃名ハ 葉子ハ 箱内匠式ハ 御飯詩ハ 食詩ハ 又折櫃あり

飯櫃ハ 椽乃名ハ 葉子ハ 箱内匠式ハ 御飯詩ハ 食詩ハ 又折櫃あり

椽乃名ハ 葉子ハ 箱内匠式ハ 御飯詩ハ 食詩ハ 又折櫃あり

椽乃名ハ 葉子ハ 箱内匠式ハ 御飯詩ハ 食詩ハ 又折櫃あり

椽乃名ハ 葉子ハ 箱内匠式ハ 御飯詩ハ 食詩ハ 又折櫃あり

椽乃名ハ 葉子ハ 箱内匠式ハ 御飯詩ハ 食詩ハ 又折櫃あり

椽乃名ハ 葉子ハ 箱内匠式ハ 御飯詩ハ 食詩ハ 又折櫃あり

波良

天武紀大角小角鼓吹 旌幡弩抛等之類不應

成形成圖說卷之十四



久太同上○字鏡
俗云此々其々をいひ古の久太あり
籥音蕉○正韻吹簫所以勸役○急就章籥籥起唇課後先
節○樂書籥簧及籥為作休之節令闌闌欲相彌令吹指為
陽亭長所吹
角○和名鈔引兼名苑注角本出胡中
蓄名ブラアスル
凡じ〜道路鼓角と鳴し儀仗に備ふし律令に又
え〜りて號令の節に亦吹器何に後世も哮囉と用小蓋
戰國の遠風し〜之と鼓吹はあふあり万葉に鼓の音
ハ雷の音を〜まで吹かせる小角のお〜と泳り
志日本考云每隊相去一二里
吹海螺為號相聞即合救援
遂に里正所驛亭長等の人
武備
管乃笛和名鈔小角
筒貝和訓葉竹

成形圖說卷之十四終

